

## 研究ノート

## 瓜生岩子の生涯発達から考える保育のこころ

横 畑 泰 希<sup>1)</sup>

The Spirit of Childcare Examined from the Perspective of Lifelong Development of Philanthropist Iwako Uryu

Taiki Yokohata

## 要 旨

本稿は、保育の質の中核を成すのを保育者としてとらえ、その保育者の資質と保育のこころについて、明治時代初期の社会事業家として著名な瓜生岩子の生涯発達を資料として考察を試みた。瓜生岩子の生涯発達を四季になぞらえて整理すると、春「心の基盤・核を作る時」、夏「利他共生の自覚：精神的自立の時」、秋「自分への道を求め進んだ時」、冬「次世代への継承の時」であった。瓜生岩子の生涯発達から考えられる保育のこころとは、「アタッチメントに基づく保育」「利他共生に基づく保育」をあげ、その根底にある保育のこころとして「人間保育」があると論じた。

キーワード：保育のこころ、保育者、生涯発達、瓜生岩子

## 1. 問題と目的

## (1) 保育のこころ

近年、保育の量的拡大に伴う保育の質の低下が危惧されていることは周知の通りである。こうした流れの中で、「保育の質とは何か」を論考する研究が積み重ねられてきてはいるが、様々な見解が示されているのが現状である（例えば、大宮, 2009; 大倉・赤西・一色, 2017など）。こうした現状から鑑みても、保育の質は物的環境や人的環境、さらに制度的側面をも含む総合的なものであることは間違いないが、この中でも中核を成すのは人的環境の保育者であろうと考える。

『保育所保育指針〈平成29年告示〉』の「第5章

職員の資質向上」では、「保育所は、質の高い保育を展開するため、絶えず、一人一人の職員について資質向上及び職員全体の専門性の向上を図るよう努めなければならない。」と記されている。すなわち、保育者の資質と専門性という二つの柱を向上させることが、質の高い保育を裏打ちすると述べられている。後者の専門性として、「状況に応じて臨機応変に環境構成ができる力」、「保護者とのコミュニケーション力」（堺, 2018）、質の高い遊び環境をつくり出していける「プロデュース能力」、遊びを通して子どもたちにどのような力が育ったのかを見る「アセスメント能力」（原, 2018）などがあげられている。

では、もう一つの柱である資質とは何をさすのか。『日本語大辞典』（講談社）によれば、「うまれつきの。

1) 横畑 泰希 東京未来大学こども心理学部 (Tokyo Future University)

yokohata-taiki@tokyomirai.jp

資性。天性。」とある。しかし、保育者としての資質が、うまれつきのものだけによって決定されるものとは考え難い。二羽（2018）は、保育者の資質を人間性としてとらえ、「人間としてのあり方である人間性は、『(現に)ある自分』と『あるべき自分』との間を揺れ動く両義性であり、それゆえに課題であるとともに可能性であって、生まれもって変わらぬ静的なものではなく、変化するべき動的なものである。」と述べている。筆者も同様に、うまれつきものがあり、そこに生きてきた中での体験、保育を実践する中での体験が加わってくるもの、それが保育者としての人間性であり資質ではないかと考える。そして、それを「保育のこころ」として呼ぶことができよう。

ところで、ここでの「こころ」というのは、日常で使っている「心」をも包含する、精神とか魂とも呼べるものである。よい保育の「よさ」が何であるか分からなくとも、保育の質の「質」が何であるか分からなくとも、保育者はよい保育を目指し、保育の質の向上を目指すように努めている。こうしたパラドックスを見事に乗り越えている保育者には、本物の「保育のこころ」があると考えられる。

## (2) 瓜生岩子について

瓜生岩子（以降「岩子」とする）の生涯発達については、次章にて詳細に述べることとして、ここでは岩子の簡単な紹介と、岩子の生涯発達を取り上げる動機について述べておきたい。

岩子は、「わが国社会事業の母」（朝原，1950）として著名な、江戸時代末期から明治時代を生き抜いた女性である。岩子を本稿で取り上げるのは、彼女が一人の保育者としても優れていると考えているからである。1891（明治24）年、渋沢栄一氏が院長を務めていた東京市養育院の幼童世話係長に就任する。養育院の子どもたちは、「皆いじけて不活発で、精神もひがんで卑屈な上に笑うことを知らなかった」（瓜生，1954）という状態であった。ところが、岩子が保育をすると、その状態が劇的に改善されたのである。

現在、乳児院の新規入所理由の約4割が虐待である。被虐待児が心に色々な問題を抱えることは周知の通りであるが、その中に笑わない子ども、泣かない子どもが多くいる。乳児院での保育の目的は、「笑わない子どもを笑うように育てる、泣かない子どもを泣くように育てる」と言っても過言ではない。130年近く前に、そうした質の高い保育を実践した岩子に対し、筆者は心が大きく揺さぶられ、岩子の中に本物の「保育のこころ」を見て取れるのではないかと考えたのである。

## (3) 目的

よい保育・質の高い保育とは、施設整備、物的環境、職員の処遇なども含め、総合的に判断されるべきものである。それは間違いのないとしても、やはり保育を実践する保育者の資質が、最も中核をなす要素であると考えられる。保育者の資質とは、その保育者の人間性であり、さらに言えば保育者の精神とか魂とも呼べるような「保育のこころ」にも通じており、人間の生涯発達の過程で形成され、変容していくものであろう。

そこで本稿では、本物の「保育のこころ」を持っていると思われる瓜生岩子の生涯発達を資料とし、岩子はどのような人間性を持った人物なのか、その人間性がどのように発達してきたのかを知ることで、保育者に求められる人間性、保育のこころとは何かについて考察を試みる。

## 2. 方法

岩子の生涯を辿るにあたり、次の資料を使用する。

- ①喜多方市瓜生岩子刀自顕彰会（1994）『社会福祉の慈母 瓜生岩子刀自伝』
- ②朝原吾郎（1950）『わが国社会事業の母 瓜生岩子傳』財団法人瓜生会事業部
- ③瓜生祐次郎（1954）『瓜生岩子伝』瓜生岩子銅像再建期成会
- ④奥寺龍溪（1987）『伝記叢書16 瓜生岩子 全』大空社

これらを資料として岩子の生涯を辿りながら、臨

床心理学における了解的方法によって、その節目を読み取りながら、考察を加えていく。了解的方法とは、戸川行男(1974)による事例研究に用いられるもので、了解とは「わからない部分を想像で埋めて話のつじつまを合わせることで」あり、他者の心に迫る方法だと述べられている。これには人間の心をめぐる「宿命的な本質的な事情」がある。すなわち、私たちは他者の心は見ることも触ることもできないのであって、私が他者の心が分かったという意識は、あくまで私の意識であるという事情である。そこで戸川は、他者の心を知るには、私たちの心の中にある人間の基本的信仰をもとに、他者の心を理解すること以外にはないと述べている。本稿でも、瓜生岩子の生涯発達を通して、岩子の心にあるものに迫ろうとするのであり、そのためには了解的方法を用いることが最善だと考える。

### 3. 瓜生岩子の生涯

岩子の生涯略年譜を表1に示した。この年譜に沿いながら、岩子の生涯を四季になぞらえて概観する。

#### (1) 春：誕生～13歳

##### ①誕生

1829(文政12)年、「会津小田付村(今の福島県喜多方市字北町)の油商」<sup>1)</sup>である父・渡部利左衛門と母・りゑの長女として生まれた。生まれたのは、母の実家である熱塩温泉山形屋である。「岩子は母の懐に抱かれ、温泉に浴し、暖かき襦袢に包まれ、やれ可愛い子よ、孫よといつくしまれた」<sup>2)</sup>というのであるから、母・りゑ、そして実家の瓜生家が岩子の誕生を心より喜ぶ様子がうかがえる。しばらくして、喜多方の渡部家に帰ると、「初子、初孫。姑も抱き、夫も抱いて見て一家一時に春風駘蕩。和氣藹々」<sup>3)</sup>というのであるから、母の実家である瓜生家に負けず劣らず、渡部家でも岩子の誕生は喜びの一大事であったことがうかがえる。

##### ②父の死

2年後の1831(天保2)年、弟の半次郎が生まれる。父と母は「二人の幼児を愛しみ育てた」<sup>4)</sup>うえに、

店の商売も繁盛し何不足ない幸福な生活の中で、岩子は幼児期を過ごしていた。ところが、1837(天保8)年春、父・利左衛門が病により亡くなってしまった。さらに、父の四十九日が過ぎ、家業の油屋も何とか再稼働を始めた矢先に、家を火事で失ってしまったのである。利左衛門が亡くなり、家も失い、油屋の再興も叶わぬ有様で、「母りゑと岩子と弟半次の三人は山形屋へ引取られ、それで瓜生姓を名乗るようになった」<sup>5)</sup>のである。岩子8歳の時であった。

#### ③熱塩村での子ども時代

山形屋を営む瓜生家は、「熱塩村の旧家で、元禄の頃より会津藩松平侯の地方御家人。代々この村の郷土」<sup>6)</sup>であったため、娘が二人の子どもを連れて出戻っても、経済的には養えるものがあつたに違いない。岩子は、「いとし不憫といたわる祖父母」<sup>7)</sup>に愛を注がれ、熱塩村の地で「あつき恵みの出湯に浴していと健やかに」<sup>8)</sup>育てられていく。

また、熱塩村には、1380(天授6)年に源翁禪師が開基した曹洞宗示現寺がある。源翁禪師は「慈悲深い奇篤な行いの多かつた」<sup>9)</sup>僧侶であった。例えば、「食うにこまる者が、せっぱつまって持ち去るはとがめず、入って雨露を凌ぐ者あれば追うに及ばない…」<sup>10)</sup>という理由から、寺の戸締りを一切しなかったという。この源翁禪師の精神は、そのまま熱塩村の風土となり、「何処の家でも戸締りをしなかった」<sup>11)</sup>という。岩子は、「風致に富めるこの寺の境内に遊び、斯る豊かな良俗説話の中に育まれた」<sup>12)</sup>のであるから、子どもの頃から慈悲の精神や行ないを自然と摂り入れていたことがうかがえる。

#### (2) 夏：14歳～37歳

##### ①叔父山内春瓏宅での学び

熱塩村での子ども時代を5年過ごした後、「十四才の春、若松に住む叔母とめの夫で、会津藩の御典医山内春瓏のもとに行儀見習」<sup>13)</sup>に出ることになった。春瓏は、「温厚な医師で人情深い人格者」<sup>14)</sup>と評判の人物であった。この当時の会津には墮胎が横行していたが、この「悪風の矯正に努力した」<sup>15)</sup>人物でもある。春瓏は、「上下の区別なく病家に入出し

表1 瓜生岩子の生涯略年譜

西暦 (和暦)	年齢	出来事
1829 (文政12)	0	2月15日。喜多方の油商・若狭屋利左衛門・りゑの長女として、熱塩温泉山形屋 (母りゑ実家) にて生まれる。
1837 (天保8)	9	父利左衛門死去。若狭屋焼失。母りゑ、3人の子を連れ実家・山形屋に帰る。
1842 (天保13)	14	若松城下に住む叔父で会津藩御典医の山内春瓏のもとに行儀見習いに入る。
1845 (弘化2)	17	佐瀬茂助と結婚 (婿養子に迎える)。呉服屋「松葉屋」を営む。
1849 (嘉永2)	21	長女つね子誕生。
1851 (嘉永4)	23	長男祐三誕生。
1852 (嘉永5)	24	次女とよ子誕生
1856 (安政3)	28	三女とめ誕生。夫茂助、咯血の後病床に伏す (以降5年間)。家業呉服屋の番頭が金品を持ち出し失踪。
1857 (安政4)	29	叔父山内春瓏亡くなる。
1860 (安政7)	32	長女つねに病床の父の看護をさせ、行商に出始める。
1862 (文久2)	34	夫茂助亡くなる。
1863 (文久3)	35	母りゑ亡くなる。
1865 (慶応元)	37	4人の子どもの行き先を決め、自分より困る人のために身を捧げる覚悟。 長女は藩主姉君照姫の召使、長男は家老西郷頼母の小姓 次女は刀匠長尾家の養女、三女は実家の山形屋預け
1868 (慶応4・明治元)	40	戊辰戦争 (会津戦争) にて敵味方の分け隔てなく負傷者の介助。
1869 (明治2)	41	小田付幼学校設立
1872 (明治5)	44	江戸深川に上京。救養会所の実務手伝いの傍ら、経営や組織について学ぶ。
1873 (明治6)	45	小田付幼学校跡に、裁縫教授所を開く。
1879 (明治12)	51	大都村長福寺を救養事業の本拠とす。
1887 (明治20)	59	福島町長楽寺に居を移し、救済事業を本格化する。
1889 (明治22)	61	福島救育所の設立認可を受ける。
1891 (明治24)	63	渋沢栄一、安達憲忠の懇願を受け、東京市養育院の幼童世話係長となる。
1893 (明治26)	65	福島に福島育児院を開設する。若松に私立済生病院を開設する。
1894 (明治27)	66	東京下谷に水飴伝習所を設立する。
1896 (明治29)	68	女性初の藍綬褒章を受章する。
1897 (明治30)	69	4月19日福島で死去

て、世態人情に通じ」<sup>16)</sup>、「和漢の学にも通じ、深く三寶に帰依して造詣するところも浅くない」<sup>17)</sup> 人物であった。「三寶」とは仏教用語で「仏・法・僧」のことであるので、春瓏が仏教に造詣が深いことを意味している。

このような博学にして、人情にも厚い春瓏のもとで、岩子は「日夜薫陶をうけた」<sup>18)</sup> のである。具体

的には、「日常の起居一切の行ないから、見たしなみ」<sup>19)</sup> をしつけられ、「仕事の暇々、あの手本、この書物と示さるる儘に学び習うた」<sup>20)</sup> のである。何より最大の薫陶は、「春瓏夫妻の施療や喜捨による貧しきものへの慈しみ」<sup>21)</sup> の行ないを目の当たりにし、岩子自身もそれに「何くれと助力」する日々を過ごしたことだと思われる。

## ②結婚－自分の家庭を持つ

岩子が17歳の年に、呉服屋大黒屋の番頭で会津高田村生まれの佐瀬茂助と結婚した。結婚と同時に呉服屋「松葉屋」を切り盛りしていくことになったが、「商売上手でサービス万点、いやでも繁盛、拾年にして土蔵を建て、番頭一人に小僧三人」<sup>22)</sup>という繁盛ぶりであった。家庭のほうでは、5年目に長女おつねが、その2年後に長男祐三が、さらに続けて2人の女兒を儲け、4人の子の母となった。

## ③育児と行商と看病

ところが、岩子が28才の春、夫茂助が突然咯血して、重い病の床に臥す身となってしまう。さらには、一番の頼みの番頭が、店の商品や金を持ち出して逃げてしまった。当然のごとく、店の商売は全く不振の一途を辿ることとなる。

そこで岩子は、長女のつね子に夫茂助の看病を託し、自身は行商へ出ることを決意する。それからは「育児と行商と看病に、精根の続く限りひたむきに活動」<sup>23)</sup>を続ける毎日である。ところが、岩子自身の生活が苦しいにも関わらず、行商の出先にて貧しい者があれば「自分の乏しい資財をさいてこれに与え」<sup>24)</sup>、病人があれば「自分の身内を看護するように手当を尽くし」<sup>25)</sup>ていった。「その人達の喜ぶのを見るのが、何よりの楽しみであった」<sup>26)</sup>というのであった。

## ④夫茂助の死・母りゑの死

文久2年4月、岩子が34歳の時に夫茂助は帰らぬ人になった。悲嘆の中の岩子は、呉服屋をたたみ、子どもたちを連れて故郷の熱塩へ帰ることとした。しかし、熱塩に帰ったものの、「母りゑや弟半治のなぐさめも耳に入らず、精根を傾け盡したあとの虚脱状態ともいふべき、己れを忘れた姿」<sup>27)</sup>であった。さらに翌年、岩子の実母であるりゑも亡くなり、「岩子の悲嘆は愈々つのるばかり」<sup>28)</sup>となってしまう。

## ⑤示現寺にて正気を取り戻す

そのような姿で出かけて行く先は、瓜生家の菩提寺である示現寺であった。そこで「隆覚和尚に会うては身の不幸を啣ち、愚痴を繰言して」<sup>29)</sup>いたという。隆覚老師は、「何時も虚心に岩子の愚痴を聴いてや

り、茶菓を供し心から慰めて帰っていた」<sup>30)</sup>という。

ところがある日、いつものように岩子が寺に来て繰言を始めたところ、隆覚老師は「百雷の一時に落つるが如き大音声を以て、大喝つ」<sup>31)</sup>を放ったのである。さらに「世には夫が死んで、わが身も子供も病魔に襲われ、食うべき一物もなく、帰るべき里もないものが無数にある、お前の如きは幸せな方じゃ」<sup>32)</sup>と畳みかける。すると、それまで悲嘆にくれ、己を忘れ、正気を失っていた岩子の心に、「忘れられていた正気が、俄然蘇返ってきた」<sup>33)</sup>というのである。

## ⑥利他共生の精神の自覚

正気を取り戻した岩子は、「何かかう自分をゆすぶり動かすもの」<sup>34)</sup>を感じたという。心の奥底から湧き上がってくるなにかと表現してもよい。それは、これからの半生を「自分より困る人のために捧げる覚悟」<sup>35)</sup>であり、利他共生の精神を自覚した瞬間である。自分の道は利他共生の精神で生きることだと悟った岩子は、まず4人の子どもそれぞれを奉公に出したり実家に預けたりなど、行く先をしっかりと手当した。そして、1865（慶応元）年、岩子37歳の時、活動の舞台を求め、単身で喜多方に出ていくこととなった。

## (3) 秋：38歳～53歳

### ①会津戦争

喜多方を活動の本拠としてからおおよそ3年後の1868（慶応4）年8月、いよいよ会津戦争が始まる。城内に出した長男祐三、長女つね子のことにも心配であったのだろう、若松が危ないと聞いてすぐに馳せつけた。そこで岩子は、「自らは身を挺して、負傷兵には敵味方の区別なく手当を施し、医薬を与えて生死の境にある重傷者を扶けるなど、戦の恐ろしさも、自己の疲労をも忘れて、ただ精限り根限り、奔走尽力した」<sup>36)</sup>のである。岩子のこうした働きが、日本のナイチンゲールとも呼ばれる所以となった。

### ②幼学校設立

会津戦争終結後、帰る家を失った子女が多く出た。岩子は喜多方付近の農家に依頼し、そういった子女

を置いてもらうような手配をした。次に、その子女たちに教育を受けさせようと考え始めた。当時、敗戦した会津藩の子女に教育を受けさせることは、政策上好ましくないという風潮だった。それでも岩子は「断られても断られても懇願して止まなかった」<sup>37)</sup>という。その懇願が功を奏し、岩子41歳の1869(明治2)年、幼学校を設立する運びとなった。

### ③社会事業の開始

幼学校設立2年後の1871(明治4)年、諸般の情勢が重なり、幼学校は閉鎖となった。1872(明治5)年秋には、江戸深川にて救養会所の運営者である大塚十右衛門を訪ね、救育事業のことについて学ぶ機会を得た。半年後の1873(明治6)年3月、喜多方に戻り、閉鎖した幼学校の跡を利用して、深川の救養会所の分所を設置することを考えた。その計画は実現しなかったものの、幼学校跡地を裁縫教授所とし、「岩子自ら多くの子女を指導し、又建物の一部には貧困者や、住居を持たぬ孤独者などを住ませ、かれこれと親切に世話をした」<sup>38)</sup>のである。すると、岩子を頼って来る貧困者が増え続け、幼学校跡地では手狭になってきてしまった。そこで1879(明治12)年、隣接する大都村下岩崎(現喜多方市岩月町)にあった長福寺を借り受けて事業を継続させていった。岩子は、少しの空いた時間でも手を休めることなく古着の手入れや繕いをしていたが、それは「収容者達の暑さ寒さの衣料に、ことかかぬようにして」<sup>39)</sup>あげるためであったという。

### ④墮胎防止に心を砕く

この頃の岩子は、墮胎防止の活動にも心血を注いでいる。かつては、叔父山内春瓏も墮胎を悪習としてとらえ、これの矯正に努力した人であった。それから約40年、岩子もまた墮胎防止活動に力を注ぐこととなった。墮胎防止活動と言っても、岩子のそれは政治的な活動ではないところに、岩子らしさが見て取れる。誰かが妊娠したとの情報を得ると、岩子はまずその家を訪ねる。そこで「丁度〇〇で子がなくて、養子を頼まれたから、生かして置いて下さい」<sup>40)</sup>という頼みごとをする。つまり、貰い手が決まっているので、安心して出産してほしいと頼んでいる

のである。

岩子の心遣いはそればかりではない。出産前には襦袢やおむつを持って見舞に行き、赤ん坊が生まれると「二七夜三七夜は働けまいから、その間親の乳を下さい」<sup>41)</sup>と頼むのである。そうして一ヶ月が過ぎた頃、岩子が赤ん坊をもらいに行くと、産んだ母親はもとより、姑までもが子どもが可愛くて手離せなくなっている。「そんなら仕様がな。また他に頼むから大切に育てなさい」<sup>42)</sup>ということになる。これが岩子の墮胎防止活動である。

### (4)冬：54歳～死没

#### ①福島町(現福島市)への移住

1887(明治20)年、岩子59歳の時、かねてより縁のあった福島町の長楽寺境内に住居を構え、拠点を福島に移した。2年後の1889(明治22)年、当時の福島県令山田信道より許可を得て、貧児救済、墮胎防止を目的とする福島教育所を設立するなどした。また磐梯山の噴火や洪水被害などにより、福島周辺住民の貧窮状態は最悪なものとなっていたが、水飴の糟を利用して餅やパンを製造することで貧民救済の道を開いていった。

一方で、この頃の岩子の活動は「国家的活動に入った」とも言われるようになる。その内容とは、「東京には頻繁に出でて顯官名士の間に入出入して、貧民救済の事を説き、婦人には飴糟利用の方法を伝習し、孤児、迷い子は引き取り救助の法を講じ、身の暇には襤褸を集めて、何か工夫製作した」<sup>43)</sup>というものである。まさに、これまでの岩子の活動を総括しながらの精力的な活動を展開している。

#### ②養育院での保育

当時、東京市養育院幹事事務取扱に就いていた安達憲忠は、養育院の現状を憂いて保母の責任者たる人物を求めていた。すると、福島出身の代議士の筋から、岩子を紹介されたのである。安達の願いを聞き入れた岩子は、1891(明治24)年3月、東京市養育院幼童世話係長に就任する。

就任して子どもたちを見ると、「皆いじけて不活発で、精神もひがんで卑屈な上に笑うことを知らなかった」<sup>44)</sup>という状態であった。子どもたちがそのよう

な状態にあったのは、孤児という特殊な状況下のみならず、職員の関わり方にも一因があったようである。「これまで院児を世話しておった人達は、皆東京市の御役人で、貧児を只食べさせて面倒を見てやっているのだと云う気持ちで、唯厄介もの扱いにして来た」<sup>45)</sup> という保育だったのである。岩子は、その状況を見て、子どもたちの「精神から改めてやろう」<sup>46)</sup> 「恥ずかしくない人間に育てよう」<sup>47)</sup> という思いのもと、「この寄るべない孤児を心から憐み、温かい慈悲心で世話する」<sup>48)</sup> ように努めた。すると「児童等はだんだん笑うようになり、挙動も生々して来た」<sup>49)</sup> というのである。これは保育の専門性ではなく、岩子の人間性のなせる業であったに違いない。まさに、「職務では出来ぬ慈（なさけ）の感化。子を思ふ親心、誠は誠の心に通ふ」<sup>50)</sup> という言葉の通りである。

岩子が養育院に在籍したのは、3月から10月までのわずか半年間であるが、「忽ち全院の気風を一新」<sup>51)</sup> したのである。岩子のことであるから、言うよりもまずやって見せたに違いない。百聞は一見に如かずさながら、それを見た職員が徐々に感化されていったのではないだろうか。上述の「慈（なさけ）の感化」は、子どもたちの心を癒しただけでなく、職員の心にまで及んだことが見て取れる。

### ③その後の功績

東京市養育院を辞して福島に戻ると、多様な協力者ととともに北会津、耶麻、河沼の三郡に育児会をつくり、坂下町と若松市に産婆看護婦養成所を設立した。1893（明治26）年には福島育児院を、同年10月にはかねてからの宿願であった慈善病院として若松に私立済生病院を設立した。

1894（明治27）年の日清戦争開戦後には、再び上京し、水飴伝習所を開設。同時期には、内務省にいた後藤新平を訪問し、無料診療所開設を粘り強く進言した。1896（明治29）年、女性初の藍綬褒章を受章した。1897（明治30）年4月19日、福島にて69歳の生涯を閉じた。

### ④亡くなくても生き続ける精神

福島に岩子が移り住んだと同時に、仏教家の総意により、岩子を中心に鳳鳴会が組織されたが、同会が後に設立した福島育児院は、現在でも児童養護施設福島愛育園として運営されている。愛育園には、仁慈隠惕（じんじいんてき）と書かれた額や碑がある。これは、孔子と孟子の教えから岩子が考えた造語である。仁慈とは、人間は生まれながらに助け合う心があること、隠惕とは人の不幸や困っているのを放っておけないことを表している<sup>52)</sup>。岩子の人間性、岩子の精神は亡くならずに生き続けていることの証である。

福島鳳鳴会の他にも、有志による瓜生会が結成され、岩子の没後にも政界や財界の有志により瓜生会（瓜生慈善会）が発足している。その後福島市でも有志による瓜生彰徳会が設けられている。大正時代にあっても、四恩瓜生会が設立され、これは現在、別の法人名となって保育園が運営されている。

## 4. 考察

### (1) 岩子の生涯発達について

吉田松陰が「亡くなる前日に書き上げた」と言われる『留魂録』では、人間の生涯を四季の循環としてとらえ、稲を例えとして「春に種を巻き、夏に苗を植え、秋に刈り取り、冬には収穫を蓄えます」と表している（松浦, 2011）。これに基づいて岩子の生涯発達の四季について、それぞれの意味を考察する。

#### ①春：誕生～16歳

「春種し」は、稲の種を苗代（苗床）に撒き、苗を育てる時として表現されている。人間の心の発達に置き換えれば、精神的健康を生涯にわたって支えられるような基盤づくりの時であろう。岩子の生涯発達としての意味は、「心の基盤・核をつくる時」であったと考える。

発達臨床では、「心の発達とは世界を知ることの全過程」（川井, 1980）とされる。その「知る」とは世界の諸々を自分の中に摂り入れることである。こ

の心の発達に基盤となるのがアタッチメントである。アタッチメントとは、愛情に基づく心と心の結びつき（絆）である。その愛情に基づいた応答的な関係の中で、子どもは心を発達させていくことができる。岩子は、「母の懷に抱かれ、温泉に浴し、暖かき襦袢に包まれ、やれ可愛い子よ、孫よといつくしまれた」「一家一時に春風駘蕩。和氣藹々」「いとし不憫といたわる祖父母」とあるように、家族、親族から愛され、岩子自身もそれを実感して育った。岩子の精神的な強さ、確かさを考えれば、心の発達に基盤となるアタッチメントが、しっかりと形成されていたことが推察される。

ところで、岩子の生涯の節目で、仏教が大きな役割を果たしていたことが分かる。これは、熱塩村での「春」の時に、示現寺の境内に遊び、「斯る豊かな良俗説話の中に生まれた」からこそ、仏教的なものが心の基盤に根づいていったことが推察される。そのようにして、家族らから愛され、仏教的な良俗説話に触れながら心の基盤を育んだ岩子であればこそ、叔父山内春瓏のもとでの薫陶は、より自然に、そしてより深く心に摂り入れていったことが了解される。

## ②夏：17歳～37歳

「夏苗し」は、苗代で育った稲の苗を田んぼに植え、実を实らせる時期として表現されている。人間の心の発達に置き換えれば、子どもから大人への階段であり、精神的自立という段階であろうと考える。岩子の生涯発達としての意味は、「利他共生の自覚：精神的自立の時」であったと考える。

結婚は、人間にとって親からの自立としてとらえられる。岩子にとってのそれは、17歳の時であった。それと同時に家業を営むようになり、4人の母となり、夫が病床に伏してもなお行商で生計を立てようとする。こうした姿は、一人の人間として精神的に自立した姿として映るだろう。ところが、夫と実母の死という喪失体験が相次いだことで、岩子は正気を失ってしまう。人間にとって喪失体験のダメージは果てしなく、それが相次いだのであれば、どれほど

しっかりとした心が育っていても壊れてしまいかねないほどのダメージである。それでも岩子は、示現寺住職の大喝の力もあって、正気を取り戻すことができた。

なぜ正気を取り戻し得たのか。叔父山内春瓏のもとで、あるいは行商に出た先で、数多くの貧困者や病者を目の当たりにしてきたが、その姿が「一瞬に脳裡をよぎり、頭の中のモヤモヤが、一時に拭い清められ、湧然として心内の正気を取り戻し得た」という。このようにして正気を取り戻すためには、それまでの生涯発達の中で、しっかりとした心の基盤が発達していることが必要である。その意味で岩子は、「春」の時に育てられてきた心の基盤、核をもっていた。アタッチメントは、その人の生涯にわたる精神的健康を保障するというが、それが実証された形である。

正気を取り戻すと同時に、「これからの半生を自分より困る人のために捧げる覚悟」、すなわち利他共生の精神が自覚された。本来の意味での精神的自立を迎えた時だと思えることができよう。仏教に自利利他という言葉がある。他者のため（利他）に自分を高める（自利）という意味合いである。これだけでも十分な精神的自立としてとらえられるが、岩子の精神はさらに高いところにあったのではないか。それが、「自利利他を超えた『利他共生』の思想」（金子・横畑, 2013）である。自利は求めず利他だけを求め、しかもそこで共に生きるという思想である。4人の子どもの行く先を手当てし、単身で喜多方に活動場所を求めて行ったことが、岩子が利他共生を自覚した時であり、本当の精神的自立に至った時であると考えられよう。

## ③秋：38歳～53歳

「秋刈」は、実った実を刈り取って収穫する時期として表現されている。人間の心の発達に置き換えれば、本来の自分を自覚するという精神的自立を得て、その心に基づいて過去の自分、現在の自分、はては後の自分をも統合しながら、日々を生きようとする時であろう。自己実現への道を希求する時だと言っ



てもよい。岩子にとっての「秋」は、「夏」での利他共生の自覚に基づき、ただひたすら利他行に邁進した時期である。それは、「自分への道を求め進んだ時」であったと考えることもできよう。

会津戦争では戦火の中で常に負傷者と共にいた。裁縫教授所でも長福寺でも、常に貧救者らと共に生活をした。墮胎防止の活動においても、利他共生の精神を感じずにはいられない。妊娠を聞きつけると「養子を頼まれたから」と嘘をつき、墮胎をさせないように仕向けている。墮胎をしたいのではなく、貧困で墮胎せざるを得ない時代である。それでも、墮胎は悪習であり止めさせなければならない。これは、叔父春瓏から受け継がれている精神であるが、真正面から墮胎を止めるように手を尽くし、説得しても上手くいかない。そこで、相手の懐に飛び込み、相手の立場に立ち、相手の言葉にて話をする事で墮胎防止を成功させていった。

物理的・空間的に共にいて、共に生きることも共生だが、何か問題を抱えたときに共に考え、共に気持ちを分かち合うことも共生と呼べるのではないか。少なくとも岩子にとっての利他共生は、こうしたすべてをとらえているものと考えられる。

#### ④冬：54歳～死没

「冬蔵し」は、収穫した実を蓄える時期として表現されている。人間の心の発達に置き換えれば、本来の自分、これまでの自分、これからの自分を了解しながら、さらには他者の心の中に生きている自分をも了解可能な時期であると言えよう。岩子の生涯発達としての意味は、「次世代への継承の時」である。

仏教に造詣が深い岩子であれば、わが生は死に向かって進んでいることを、自然と受け止めていたと考えられよう。「心理学の『自我』もまた、死によって崩壊する。しかし、精神とか魂といわれるものは崩壊しないで、永遠に生き続ける。そのように考えられる。考えられるとは、この場合『信じられる』ということである。」(金子, 2002)。この言葉を借りれば、岩子は自分が亡くなった後も、自分が自覚した自分への道、つまり利他共生の精神は生き続け

るであろうことを信じ、それを種々の手段を講じて残す(冬蔵し)ように努めたのだろう。そして、岩子が亡くなった後も、岩子が残した言葉(仁慈隠愆)、銅像、書物などを通して、後世の者たちの心に岩子の精神が生きているものとして了解される。

#### (2) 瓜生岩子の生涯発達からみる保育のこころ

##### ①愛(仁慈隠愆)にもとづく保育

岩子の生涯をふり返ると、強く豊かな心の持ち主であったことがわかる。いわゆる健康な心をもって、生涯を生き抜いていた人である。先述したように、その心の健康の原点は、アタッチメントにある。アタッチメントを形成する鍵は愛である。大人から愛され、愛されていることを実感して形成されるのである。人間というのは、「愛されなければ愛せない」(川井, 2008)という存在である。その点から考えれば、岩子は、自分が愛されてきたことを実感しているからこそ、その愛を多くの人に向けられたのだと了解される。

このことは、保育にとって、保育者が子どもをいかに愛するかが重要であることが再認識される。岩子が養育院の保母に入った際、何か特別な技術を駆使したのではなく、「憐れみ」「慈悲心」をもって関わるようにしたのである。これは、子どもの心を育てるのは決して物質などではなく、そこに関わる大人の心だということを物語っている。そして、それが「愛」である。

岩子の「愛」とは何か。「憐れみ」「慈悲心」、これも岩子の愛を象徴する言葉であろう。さらに象徴的な言葉が、仁慈隠愆(じんじいんてき)であると考える。儒教思想の解説は他に譲るが、「仁」「慈」「隠愆」のすべてが根源的な愛を意味しているのであって、岩子の愛がこの言葉に凝縮されている。

では、愛(仁慈隠愆)にもとづく保育とは何か。仁慈とは「人間は生まれながらに助け合う心があること」である。赤ん坊は生まれながらにして、人と関わり合うことのできる能力(コンピテンス)を持っている。子どもからのコンピテンスを、逃さずしっかりと応え、それに基づいた応答的な関係を築ける保育

である。隠傷とは「人の不幸や困っているのを放っておけないこと」である。惻隱の情とも換言できよう。子どもが泣いていたら咄嗟に駆け寄って抱き上げてしまう、子どもが横で転んだら咄嗟に手が出てしまう。こういう保育者であってほしい。

### ②利他共生にもとづく保育

先述したように、岩子の精神的自立は利他共生の自覚であったと了解される。それは、自分を求める道、つまり自己実現への道でもあったに違いない。保育のこころを考察する時、この利他共生の精神から二つのことを考えることができる。一つは、保育者自身である。他者（子ども）を利して共に生きるというこころは、言うまでもなく保育そのものである。子どもの最善の利益を実現する保育である。これを自覚し、この道を歩もうとすることが、保育者自身の自己実現になり得るのではないかと考える。

もう一つは、子どもである。保育の場では、子どもと保育者が、限られた時間ではあるが共に生きている。しかし、岩子の利他共生の精神は、そうした物理的な共生のみならず、心と心の共生をも包含するものであった。心と心の共生とは、気持ちの共有であり共感である。子どもが不安を感じて泣いている時に、そばに保育者がいてくれるのは有難い。しかし、ただそこにいるだけでは、子どもは不安を解消できない。子どもがなぜ泣いているのか、そして、どれだけの不安を感じているのかを了解することが、利他共生にもとづく保育のこころである。

### ③人間保育

保育のこころとして、「愛（仁慈隠傷）にもとづく保育」「利他共生にもとづく保育」を提言してきたが、これら保育のこころの奥にある、さらに根源的な保育のこころがあると考えられる。それが「人間保育」である。人間保育とは、子どもを人間として保育することである。それには、子どもを保育の対象としてではなく、“自分と同じ心を持った人間”として見ることのできる人間性が必要である。

児童虐待、高齢者虐待をする側の人間は、児童や高齢者を保育や介護の対象としてしか見ておらず、

つまり人間として見られなくなっている。虐待のニュースに触れると、「鬼のような」「人間とは思えない」などの評論が聞かれる。児童や高齢者を人間として見られないのであれば、それは人間としての心を持ち合わせていないと言ってよい。それは人間性が欠如した状態と言い換えられよう。

岩子の生涯を概観すると、人間愛に基づいて他者と関わり、利他共生の精神に基づいて他者に寄り添っている。その根源にあるものは、そうした貧救者や孤児を支援の対象者としてではなく、“自分と同じ心を持った人間”として見ることのできる「こころ」である。こうした「こころ」がある人間が保育者であればこそ、子どもの心もまた健やかに育つのではないだろうか。そういう保育者であってほしいと願う。

## 5. おわりに

瓜生岩子刀自のおかげで、保育のこころについて考察を深めることができた。改めて実感を強くしたのは、保育は技術でもプログラムでもない、保育は人だ、ということである。岩子の生涯から保育のこころを考えた今、こうしたこころを持ちうる保育者を育てたい、育てなければならぬと切に感じている。

本稿では保育のこころとして三点を論じたが、残念ながら割愛した視点が、まだいくつか残っている。これについては別の機会を得て論じたいと思う。合掌。

### 文献

- 朝原吾郎 1950 わが国社会事業の母：瓜生岩子傳 財団法人瓜生会事業部  
原孝成 2018 これからの保育者に求められる資質・能力とは 人と教育 12 p13-16  
長谷川洋 2013 “日本のナイチンゲール”瓜生岩子と“鹿鳴館の花”大山捨松の生涯 Shneller 87 p26-30  
鎌田真理子 2012 社会救済事業家としての瓜生岩子の軌跡—その実践と意義— いわき明星大学大学院人文科学研究科紀要 10 p16-35

- 金子保 2002 生涯発達心理研究－淑徳大学開学者・長谷川良信の生涯とその精神を中心に－ 学文社
- 金子保・横畑泰希 2013 乳児保育 演習と講義 改訂版 クオリティケア
- 川井尚 1980 発達臨床－その基本的な考え方と臨床法－ 宇野正威編 臨床精神医学 最近のトピックス3 星和書店
- 川井尚 2008 母と子の面接入門 クオリティケア
- 厚生労働省 大臣官房統計情報部 第19回生命表 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/19th/index.html> (2018/09/13閲覧)
- 松浦光修編訳 2011 【新訳】留魂録－吉田松陰の「死生観」 PHP 研究所
- 宮崎義宣 1979 福島愛育園の足跡とビジョン－瓜生岩子の基本的理念を引き継いで－ 月刊福祉 62(8) p74-77
- 内藤二郎 1979 安達憲忠と瓜生岩子 駒大経営研究 10(2・3) p135-145
- 二羽礼 2018 保育者の資質とされる人間性についての考察－保育者による内省の語りをもとに－ 臨床人間関係論研究 4 p92-101
- 奥寺龍溪 1987 伝記叢書16 瓜生岩子 全 大空社
- 大倉得史・赤西雅之・一色伸夫 2017 第109回公開シンポジウム 保育の質とは何か－事例を通して考える－ 子ども学 19 p103-128
- 大宮勇雄 2009 市場化を目指す保育政策と「保育の質」－希望としての「保育の質」－ 教育 59(11) p87-94
- 堺秋彦 2018 保育実践に必要な保育者の「資質・能力」の考察と提言－教育の目的、幼稚園教育の基本、教師の役割に着目して－ 桜の聖母短期大学紀要 42 p93-103
- 鈴木妙 2018 社会福祉活動に半生を捧げた瓜生岩子 埼玉医科大学短期大学紀要 29 p15-24
- 戸川行男 1974 自我心理学 金子書房
- 瓜生岩子刀自顕彰会 1994 社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝 瓜生岩子刀自顕彰会
- 瓜生祐次郎 1954 瓜生岩子伝 瓜生岩子銅像再建期成会
- 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修 1989 日本語大辞典 講談社
- 横畑泰希 2017 保育者の資質に関する研究－瓜生岩子の生涯発達からの一考察－ 日本保育学会第70回大会発表要旨集 p604

## 注

- 1) 瓜生岩子刀自顕彰会 (1994) 『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 瓜生岩子刀自顕彰会 P4
- 2) 奥寺龍溪 (1987) 『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 大空社 P9
- 3) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P13
- 4) 瓜生祐次郎 (1954) 『瓜生岩子伝』 瓜生岩子銅像再建期成会 P11
- 5) 上掲書『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 P4
- 6) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P9
- 7) ～ 8) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P30
- 9) ～ 11) 朝原吾郎 (1950) 『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 財団法人瓜生会事業部 P3
- 12) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P4
- 13) 上掲書『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 P4
- 14) ～ 15) 上掲書『瓜生岩子伝』 P13
- 16) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P40
- 17) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P31
- 18) ～ 19) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P4
- 20) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P32
- 21) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P7
- 22) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P8
- 23) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P9
- 24) 上掲書『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 P4
- 25) ～ 26) 上掲書『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 P5
- 27) ～ 31) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P11
- 32) ～ 34) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P12
- 35) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P13
- 36) 上掲書『瓜生岩子伝』 P17
- 37) 上掲書『瓜生岩子伝』 P19
- 38) 上掲書『瓜生岩子伝』 P22
- 39) 上掲書『瓜生岩子伝』 P26
- 40) ～ 42) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P21
- 43) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P195
- 44) 上掲書『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 P9
- 45) 上掲書『瓜生岩子伝』 P31
- 46) 上掲書『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 P9

- 47) 上掲書『瓜生岩子伝』 P32
- 48) 上掲書『社会福祉の慈母：瓜生岩子刀自伝』 P9
- 49) 上掲書『瓜生岩子伝』 P31
- 50) 上掲書『伝記叢書16 瓜生岩子 全』 P210
- 51) 上掲書『わが国社会事業の母：瓜生岩子傳』 P26
- 52) 社会福祉法人福島愛育園パンフレット

(よこはた たいき)

【受理日 2018年11月15日】